

スポーツジャーナリスト 生島 淳氏

1967年宮城県気仙沼市生まれ。早稲田大学社会科学部卒業後、博報堂勤務を経てスポーツジャーナリストとして独立。メジャーリーグやNBAなどのアメリカンスポーツをはじめ、ラグビー、卓球、水泳、陸上競技など幅広い競技種目の取材・分析記事を手がける。

主な著書に『ラグビー日本代表ヘッドコーチ エディ・ジョーンズとの対話 コーチングとは「信じること」』(文藝春秋)『駅伝がマラソンをダメにした』(光文社新書)『箱根駅伝』(幻冬舎新書)『愛は負けないー福原愛選手ストーリー』(学研)など。『Number』や『陸上競技マガジン』などの雑誌、WEBにも連載多数。趣味の伝統芸能鑑賞が高じて、歌舞伎や落語、講談などに関する取材記事も手がける。東日本大震災以降、故郷の宮城県気仙沼市の被害に関する取材・執筆を行ない「みなと気仙沼大使」「みやぎ絆大使」の肩書きも持つ。



速さで負けても鋭さで勝つ! ネット時代にこそ、心を動かす批評性のあるスポーツ記事を

NBAからメジャーリーグ、駅伝まで 茶の間でテレビ観戦が生島家の習慣

編 スポーツジャーナリストの中でもとくに生島淳さんの場合、テーマにする競技種目の幅が広いと感じるのですが、小さい頃からいろいろなスポーツを見るのがお好きだったのでしょうか。

生島 出身が地方(宮城県気仙沼市)なので、スタジアムで観戦する機会はあまりなかったのですが、テレビで何かしらのスポーツを見るのが我が家の習慣みたいなものでした。野球、ラグビー、陸上に水泳。僕が小学校5年生だった1978年、フジテレビ系列でメジャーリーグの試合を放送していたので、メジャーリーガーのプレーを見るのも楽しみでした。そして何と言っても、男子マラソン界に颯爽と登場した瀬古利彦さん(当時、早稲田大学)は、僕にとってスーパースターの一人でしたね。

編 生島さんご自身も早稲田大学に進学されたわけですが、何かスポーツをされていたんですか。

生島 僕はずっとメディア志向なんです。中学生のときに小林信彦さん(『オヨヨ大統領』『唐獅子株式会社』シリーズなどの小説、映画評論で知られる)の文章に憧れ、自分も文筆業に

就きたいという明確な意識があったので、高校時代は新聞部に、大学時代は雑誌を作るサークルに入り、つねに文章に関わりながら学生生活を送っていました。当時の早稲田は、野球部に小宮山悟、ラグビー部に清宮克幸というスター選手がいたのでスポーツについて書くことが多かったのですが、小劇場演劇も盛んな時期でしたから、試合だけでなく舞台なども観て回り、小林信彦風のエッセイみたいなものを書いていました。いまやっていることと大して変わりませぬ(笑)。

編 卒業後、出版系でなく広告代理店の博報堂に就職したのは、何か理由があったのでしょうか?

生島 就職活動では出版社やテレビ局志望でしたが、いま一步のところ採用に至らず、最終的に博報堂でお世話になろうと決めました。僕はダメ社員でしたが、働いている人たちがとても魅力的でした。ここで身に付けたことの多くは、いまでも役に立っているんですよ。たとえば、新入社員は入社してすぐにKJ法という情報整理術を叩き込まれます。大まかに言うと、どんどんアイデアを出して行ってそれをグルーピングしていく手法なんです。その訓練を実践の中でこなしていったのは、分析的なものの見方を身に付けるのに最適だったと思います。スポーツを観て批評的な視点で書こうとするときまず基本にな

るのは、試合や選手に対する分析的な視点ですからね」

編 博報堂では、社員として仕事をしながら文筆活動を始めていらしたそうですね。どのようにスポーツ記事を受注していったのですか？

生島 僕のジャーナリストとしての出発点は“持ち込み”でした。もともとアメリカのスポーツが大好きで、1993年にアメリカの大学バスケットの記事をNumberに持ち込んで、気に留めていただき、その後に1ページの記事からスタートしました。そこから徐々に仕事が増えていき、記事を読んだ別の出版社やラジオ局の人が声をかけてくれるようになったんです。仕事が増えると、ある競技を取材して培った視点を別の競技に応用できるようになっていく。するとさらに面白いことが増えていき、誰かに『これ知ってる？』って問いかけてたくなる。だから基本的には自分が興味のあるものを仕事にしてきた感じです。

編 どんどん興味が広がりお仕事が広がっていく中でも、スタートはアメリカの大学バスケットの記事であり、その後もメジャーリーグについて何度もお書きになっていますし、やはりアメリカのスポーツが原点になっているのでしょうか。

生島 そうですね。小学生の頃からメジャーリーグの中継は夢中で観ていましたし、『アメリカ縦断ウルトラクイズ』を観て育った世代ですから、アメリカへのあこがれは強かったですね。1980年からは、アメリカ大統領選挙のたびにワクワクしてチェックしていました(笑)。1980年代から1990年代にかけては、アメフトのジョー・モンタナ、NBAのマイケル・ジョーダンと、スーパースターが見られたのも大きかったですね。

編 スポーツだけでなく、文化も政治も(笑)。

生島 アメリカ映画も好きですし、総じてアメリカという国が好きなんですね。20代から30代にかけては、50州全部を訪れる計

画を立てていたほどです。さすがに全州制覇はまだ達成していませんけれど、そうとうな地域を何度も訪れているので、トラブルに巻き込まれた経験も少なくありません。9.11のテロが起こった日もロサンゼルスにいたんですよ。あの日に帰国するはずが空港で足止めを食らって金曜日まで帰れなかったのを覚えています。トランプ政権になってからいろいろ問題もありますが、それでも未だにアメリカならではのパワーがあるし魅力があります。アメリカへの憧れというのは、自分の仕事の重要なバックグラウンドになっているのだと思います。

ジャーナリストとしての二つの柱 「インタビュー」と「批評性」

編 1999年に会社を辞めて独立し、スポーツジャーナリスト一本で活動を始めるわけですが、生島さんが対象にしている競技種目や掲載される媒体は非常に幅広いですよ。それら全体を貫く大きな柱のようなものはあるのですか？

生島 僕の仕事には二つの方向性があると思っています、その一つは「インタビュー」です。実は独立してからしばらくして、ラジオでスポーツの話をするようになり、この10年ほどはテレビで司会も務めました。そこで培ったのは、明るく自分を開放して、相手にリラックスしてもらうことでした。こちらで、話しやすい雰囲気をつくってあげるのが大事なんだな、と。

編 そうしてリラックスした相手から引き出した言葉を、とてもしリアルに文章化されていますよね、生島さんの記事は。

生島 相手が話している雰囲気を再現するのが好きなんです。たとえば大阪弁を大阪弁らしく書くというのは簡単そうで意外と難しい。でも、それが苦になりませんし、口調を再現することが選手のキャラクターを伝えることにつながるのかな、と。



NBA超すごいヤツ全集

カザン (1998年4月)



大国アメリカはスポーツで動く

新潮社 (2008年8月)

子どもの頃から落語が好きで、歌舞伎や講談などの舞台や高座もたくさん見て、作品の原作を読んでみる、ということを繰り返しているうちに、書き言葉と話し言葉のハイブリッドな表現ができるようになってきたのかもしれない。

編 そんな独自のインタビュー法とリアルな文章化が、生島さんの一つの柱で…

生島 加えてもう一つ大切にしたいと思っているのが「批評性」です。最近のメディアには速報性が求められがちですが、速さだけでは“考察”が足りなくなるんです。たとえばお正月の風物詩・箱根駅伝の記事。WEBでは1月2日から始めて3日までの間に、遅くとも4日の午前中には出尽くしますが、1月7日に遅れてアップした記事がこれまでの中では一番多く読まれたんです。順位や選手のコメントを中心に「速報性」よりも、スクールカラーや監督の戦術までを取り込んだ“見立て”には需要があるのだと気づかされました。起きたことに対して、どんな見立てをするのか。そして、誰も拾わないような、選手や監督の言葉を再構築して読み応えのあるものに仕上げられれば、少々遅れて出しても、速報とはまた違った記事がつかれるんだな、と感じました。

編 批評性を重視し批判的な意見を打ち出すのは勇気が要ることではありますか？

生島 批判するというのは、否定することとは違います。そこにある問題を共有しながらスポーツ界を発展させていくためのものだと信じたいですね。箱根駅伝を例にとると、そもそも僕が箱根駅伝について書き始めたきっかけは『駅伝がマラソンをダメにした』（2005年／光文社新書）という本でした。かつて箱根駅伝で活躍した瀬古利彦さんが国際大会で活躍した花形種目で、近年、勝てる選手が出てこなくなったのは何故だろ

う？ その理由を箱根駅伝ブームと絡め、選手の練習量やレースの適正距離などから分析していくと、「箱根駅伝が選手生活のピークになってしまった結果、マラソンが弱くなったのではないか」という仮説を投げかけてみたんですね。この本がそれなりの反響を呼んで、大学の監督さんたちといろいろ話すことが出来た。僕自身、そこから「箱根駅伝について書いてください」という依頼が増え、さらに深くこの競技に関わりさらに批評性を持った記事を書ける機会を得ることができたわけです。単なる否定ではなく発展のための批判するというのは、スポーツに限らずジャーナリストの重要な役割なのではないかと思えますね。

インターネット時代の ジャーナリストの立ち位置

編 先ほどWEB媒体での反響のお話が出ましたが、インターネットの影響力がどんどん強くなる中で、スポーツジャーナリストの仕事はどうなっていくのでしょうか。

生島 僕が仕事を始めた頃はまだ、雑誌・テレビ・新聞・ラジオといったオールドメディアが主流でしたが、いまはたしかに、インターネット中心の時代になりつつありますね。こうした時代の大きな変化の一つに、ファンが発信力を持つようになったということが挙げられるでしょう。アマチュアの方がファン目線で撮った写真をアップすると、それに対する需要が、それなりにあるわけです。例えば野球選手がセンターの守備位置でただぼーっと立っている写真は、オールドメディアではまず掲載されませんが、熱烈なファンにとっては価値があるかもしれない。中にはプロ顔負けのカメラを使ってかなり精度の高い写真を撮るファンもいて、SNSで発信された写真は反響も大きいですよ。たしかに時流の変化に応じてメディアのあり方も変わっていかなくて



箱根駅伝 新ブランド校の時代
幻冬舎新書 (2012年11月)



駅伝がマラソンをダメにした
光文社新書 (2005年12月)



箱根駅伝 ナイン・ストーリーズ
文春文庫 (2015年12月)

はいけないけれども、流されてはいけないと思います。メディアも書き手も自分の立ち位置をしっかりと考えていかないと。僕が、媒体に関係なく「批評性」を大切にしている理由も、そこにあります。

編 批評性ともう一つ、物語性。スピード重視のインターネット時代だからこそ、スポーツ記事にも、心に響く奥深さが必要になってくるのではないですかね。

生島 僕がかつて取材した『ニューヨーカー』の編集者ロジャー・エンジェルという人がこんなことを言っていました。『野球とは一本の糸で紡がれた物語なんだ。1回表から物語が始まり、ゲームセットまで続いていく』と。この言葉を、個人的にとっても大切にしています。ネット全盛のいま、一部を切り取ったものが次々消費されていくような風潮がありますが、書き手は、一本の糸でつながっている全体像をどう見せられるかが勝負だと思うんです。

編 ドラマ性と言えば、2020年の東京オリンピックに向けて、社会全般に、とにかく盛り上げていこうという傾向がありますが。

生島 メディアや人々の暮らし全体がオリンピック一色になってしまうのは、アジア圏の特徴だと思っています。あと、アメリカ(笑)。とくに日本のメディアはタレント主義が強く、スター選手を祭り上げてもてはやす傾向があります。批評性は海外と比べると薄いですね。でも、コンテンツを盛り上げようとするテレビや、広報からだけでは伝わらないこともあります。競技の面白さを伝えるのに、本当に大事なこともまだあるはず。僕としては、速報性よりも、競技をもっと楽しめる「見立て」を大切にしていきたいですね。

スポーツだけに限らない 仕事の幅広さは興味の幅広さ

編 スポーツの仕事だけでも多岐にわたっているのに、歌舞伎や講談といった伝統芸能に関わる著作も手がけていらっしゃいますね。

生島 子どもの頃から落語が好きだったので、伝統芸能には興味がありましたし、大学時代は小劇場演劇をかなり熱心に観たので芝居そのものも大好きです。歌舞伎に関して言えば、2008年の9月以降、東京での公演はすべての演目を観ています。ちょうど見始めた時期に、『さよなら歌舞伎座公演』が始まり、珠玉の舞台を見られたのが大きかったと思います。そのあとはもう取り憑かれてしまったという感じで(笑)。歌舞伎を観始めてすぐに白水社の『歌舞伎オン・ステージ』シリーズ全26巻を買い揃えました。ここに歌舞伎の演目の台本が載っているので、観劇の前に読んでおくんです。すると、意外にも、実際の公演で台詞がはしょられていることもあるんです。この省略された部分を知らないと本当の意味がわからないこともあります。

編 この10年でとくに記憶に残っている歌舞伎役者さんは？



生島 あの時からもう、先代の中村芝翫、中村富十郎、市川團十郎、中村勘三郎、そして坂東三津五郎まで鬼籍に入っていました。スポーツもそうですが、やはりライブで見ておくのはとても大切なことだと思います。2018年には高麗屋三代襲名のインタビューの仕事をいただいたのですが、たくさんの役者さんたちの芝居を10年間欠かさず観てきたおかげだと思っています。

編 最近は歌舞伎から講談へも、フィールドが広がっているそうですね。

生島 講師の神田松之丞さんを知って以来「これはすごい!」と通い詰めるようになりました。松之丞さんは、令和を代表する芸術家になるでしょう。ここ数年は、松之丞さんのことばかりオススメして、「宣教師」と呼ばれてます(笑)。講談に触れてみて、歌舞伎との間に相互的な補完作用があることにも気づきました。あらたまって勉強しようなんて思わなくても、仕事をすればするほど知識は増え、関わる分野を拡げていけるということを、歌舞伎や講談を通じて実感しましたね。

編 講談以外で、新たに刺激を受けたものはありますか?

生島 最近、京大出身で競技かるたの名人糸原圭太郎さんに取材したんです。もともと白洲正子さんの『私の百人一首』という著書が好きで、最近では漫画の『ちはやふる』にハマっていたので、タイミングが良かった。しかも、取材では糸原名人がサッカーのフォーメーションを見てかるたの置き方を改めたという話を伺って、この人は凄い!と思いました。かるた界では、置き方は固定しておくのが普通。ポジションチェンジは邪道と言われるそうですが、そこに敢えて挑戦するこの人はきっと歴史に名を残すだろうと直感しました。要注目ですよ!

尽きることのない興味 スポーツ界の新しい動き

編 歌舞伎に講談、かるたと、どんどん幅を拡げすぎて、スポーツに対する興味が薄らぐことはないのですか。

生島 人でも競技でも、スポーツへの興味が尽きることはありません。最近取材をして面白いなと思ったのは、スポーツライミングです。見応えがあってテレビ向きですし、クリエイティビティがありますよね。この競技は面白いですよ。ただ、オリンピックを見据えて考えると、ボルダリング、リード、スピード複合の3種目あり、日本の選手たちはボルダリングが得意ですが、総合力では日本はまだ強化が必要です。とくにスピードクライミングが弱点ですが、実はスピードクライミングに関しては、そもそもインフラが足りないんです。ブームに乗ってボルダリングジムがだいぶ造られました。インフラがなければ強化は進まない。スポーツと経済は結びついているので、簡単になくなってしまいう可能性もある。こうした視点が必要だと思います。

編 生島さんご自身の今後のビジョンは?

生島 東京オリンピックの前に、2019年にはアジア初のラグビーワールドカップが日本で開催されるのでそれに向けてきちんと作品を作りたいと思っていますし、オリンピック後も、箱根駅伝が2024年の第100回大会に向けて盛り上がっていくでしょうから、やるべき仕事はたくさんあります。ただ、これまで積み重ねてきた手法や技術は失われなくて違う形でも応用できますから、スポーツに限らずどんどん新たな分野に挑み「批評性」に磨きをかけ、50代でそれなりの結果を出せればいいと思います。自分が面白いと感じたことを、どうしたら相手に面白く伝えられるのか。それを、いつまでも考えて続けていきたいですね。

